

経営のヒント120 学びて時にこれを習う!

論語、開巻冒頭の言葉

皆さんもご存知の有名な言葉「論語の冒頭」です。

学びて時にこれを習う また説ばしからずや。

朋あり遠方より来る また楽しからずや、人知らずして慍みず、また君子ならずや (学而編)

孔子は、政治に深くかかわって挫折し、亡命同然に弟子らと共に諸国周遊の旅に出るも、何の成果を得られずに14年の旅を終えて、69歳の時に故郷の魯の国に戻ります。以降はふたたび政治の世界にかかわらず、ひたすら弟子たちの教育にたずさわりました。そういう孔子の一生を考えてみると、この文章の重みを感じられます。

通常は以下のように解釈されています！

学んで時々おさらいする。よろこばしいことだね。

旧友が遠くから訪ねてきてくれた、楽しいことだね。

他人がわかってくれないからと言って、ムツとしない。それが立派な君子だね。

そうになりたいものだね。

しかし、孔子の人生を考えると違った解釈となるのではと思えます。

まずは「時」という解釈です！

「ときどき」ではなく、「その時」ではないのか？

偶然ではなく、必然！必要な時、絶妙な時、その時。

次に「説」の解釈では、「喜ぶ」ではなく、自分の価値観や夢を「説く」ことがうれしい。

又「朋」の解釈では、「友人」ではなく、価値観や志が共感共有する「同志」という意味ではないだろうか？

そうすると・・・こんな解釈になります！（細川流です）

学んで求めていると、ちょうど必要な絶妙なその時、タイミングに縁ある人と出逢った。

いろいろとその人と話していると、人生を語る中で価値観が共感共有し、同じ志を持った同志だったのだ。価値観が合う人と哲学や人生やビジョン・夢などを語り合っているととても心の中から湧き出るように楽しいものだ。

世の中の全ての人が自分のことをわかってくれる必要もない。

本当の朋、あなただけがわかってくれるだけでいい。

そんな人物になりたいものだね。

<経営のヒント>

学ぶとは、自分と自分の置かれている環境を知ること

そのためには、説く相手が必要です。

自分自身を振り返るには、メンターが必要なんですね。

そのためには、「出逢い」を大切にすることが重要です。

「樂天知命」です。

ちなみに、下山さんが好きな言葉です！